



君がため

冬休みの宿題であるところの（関係代名詞風…）百人一首だが、数年前、朝日新聞夕刊の「花まる先生」というコーナーに、「百人一首で真剣勝負」という見出しのもと、ある小学校の先生の授業の様子がレポートされていておもしろく読んだ。「かるたの授業によって集中力が高まると、ほかの授業や行事まで真剣に取り組めるようになります。文字の読み取りや言葉の増加の効果ももちろんありますが、競うことで得られる自信も大きい気がします」という部分を読むと、日比谷の授業レベルとは大きく異なることはあきらかなのだが、何でも吸収できる小学生という時期に百人一首と出会えることは、やはり幸せなことなんじゃないかなあと思う。

ちなみに、この記事には「百人一首を覚える方法は？」というオマケもあった。どんなことが書いてあるかという、「最初はゴロ合わせで教えます。例えば「あさぢふの ののしのはら しのぶれど あまりてなどか ひとのこひしき」の場合。「あさぢふの」と読んだ後に「朝10時、寝坊をしたら、余りものしかなかったよ」と小声で言う。それを何回か繰り返すうち、「あさぢふの」と読んだだけで「あまりてなどか」と書かれた下の句の札を取れるようになります。」

う～む、どうだろうね…。

*

ところで、百人一首で私が最も好きな歌は、
君がため春の野に出でて若菜摘む
わが衣手に雪は降りつつ（光孝天皇）

である。詩人の大岡信さんによる訳を示してみよう。（講談社文庫より）

あなたにさしあげようと
早春の野に立ちいでて
若菜をつむとき
私の着物の袖に
雪は散り雪は散ります

訳は今一つな感じもするが、情景は分かるだろう。春の野の新鮮なうす緑の世界に、これまたすがすがしい春の雪が舞い降りてくるという情景だ。寒さで嫌になってしまうような雪ではなく、何かウキウキしてくるような雪なのだろう。その雪の中、新鮮な若菜をつみながら広々とした野を進んでいく。雪は優しく降り続いて…とは、本当に素晴らしい。

長寿を願って贈る正月の七草に添えられた歌らしいので、「君」というのは実は年配の人なのかも知れない。また、「若菜を摘もうとしたら、雪に降られて苦労したんですよ～」と、親しい人にわざと大げさに訴えている可能性もあるという。しかし、「君」を恋人ととってももちろん構わない。私は、はじめてこの歌を読んだ時に恋人だと思い、素敵な歌だなあ♪とってしまったので、後から「長寿を願って…」という説を知った時は、ちょっと興ざめしてしまった。しかし、今でも好きな人に贈った歌だと思うことにしている。

百人一首にはイイ歌がいっぱいある。勉強という面ももちろんあるが、ぜひ好きな歌を見つけ、想像を広げながら、その歌の世界に親しんでほしいものである。